

お寺の社会性

生臭坊主のつぶやき

七

竹中尚文

1. 仏に会う

時々、「霊を見たことがあるか？」と尋ねられる。私は霊を見たこともないし、見たくもない。尋ねた人は、霊を見たことがあるのかもしれない。また、霊を見たとか、金縛りに遭ったという人にも出くわすこともある。私にはどうでもいい話しである。

仏に会うための修行をしているお坊さんの事を見聞きしたのかもしれない。その修行は大変に厳しいもので、生臭坊主の私には及びもつかない。だからと言って霊はないだろう。

仏を見る、仏に会うと言うのは、どういうことだろうか。「仏に会う」という表現は、おそらくキリスト教文化を背景に生きてきた人には奇妙な表現に思えるだろう。彼らの多くは、仏とは歴史上のブッダと理解するだろう。2400、500年も前の人物

には会えない。また、会うと言う発想そのものがない。キリスト教における神と仏教における仏はずいぶん異なる。

2. 三種類の仏

仏をどのように理解するのか、三つに分けて説明したい。

まず、第一は歴史的存在としての仏である。ブッダである。2400、500年前にインドで実在した一般に言うところの「おシャカさま」である。

『ブッタとシッタカブッタ』(小泉吉宏著)で描かれるのは、それはそうだろうと思わせるものがある。それが真理と言え、真理が仏なのである。仏とは真理そのものなのである。仏とは色も形もない真理なのである。これが二つめの仏である。

色も形もないと言っても、奈良の

大仏があるじゃないかと言われるだろう。奈良の大仏は「毘盧遮那仏(るしゃなぶつ)」と言う名前がついている。名前のある仏は他に、阿弥陀仏や薬師如来や大日如来などある。仏に名前があるのはキャラクターがある。

「誰が私を救ってくれるのか？」
「この仏様である」つまり救いの主体をはっきりさせるのである。誰が、なぜ、どのようにして、私を救うのかというストーリーが必要である。それは教理教学をともなった仏である。明確に信仰の対象となる仏である。

まとめると、一番目に歴史上に存在した仏。二番目に絶対的真理としての仏。三番目にキャラクターのある仏である。

この三つの仏の概念を我々は意識もせず区別もせずに使ってきた。私たちの暮らす社会は、仏教文化を背景としてきた。私はお寺で手を合わせる。この場合、はっきりとした信仰対象としての仏様に手を合わせている。また、実態の無いものに手を合わせていることもある。「いただきます」の合掌は食べ物を拝んでいるのではなく、「ごちそうさま」も食器

に手を合わせているわけではない。時には、人の真心に手を合わせていることもあれば、人の寛容さに手をあわせることもある。

3. 真理としての仏

色もなく形もない絶対的真理とは、法である。法とは仏法である。仏法であると言われてもよく解らない。

お参りで聞いた話しをしたい。そこに私がお参りに行くときの気分は、旅行気分である。きれいな景色のところである。急峻な山があって、その谷あいには村がある。山の緑から湧き出すかのようなきれいな空気を吸い込み、きれいな水が流れの音が快い。時間はゆったりと流れる。時間がゆったりと流れるのはお年寄りが多いからでもある。

そのうちの一軒で、おばあちゃんから聞いた話しである。そのおばあちゃんが嫁ぐ前に、お父さんがこう言ったそうだ。

「おまえ、つらかったらいつでも帰ってきてもいいぞ」

半世紀程も前の話だ。そのお父さんはきっと明治生まれの方だろう。立て前の台詞を言う世代だ。「一步、家の敷居を出たら、帰ってくるよう

なことは思うな」と言うだろう。ところが、お父さんの言葉は本音だった。

おばあちゃんが結婚した相手は長男である。舅も姑もいて、弟や妹が六人もいた。大家族の家に嫁いだのである。弟や妹が結婚をして独立する時にはできるだけことはしただろう。長男の家に嫁いだのだった。そんな中で自分たちの子供を育てた。

このおばあちゃんは、逃げ出したくなったこともあったかもしれない。もうこれ以上、頑張れないと思ったこともあったかもしれない。そんな時、おばあちゃんを支えたのは、お父さんの言葉だろう。だから、おばあちゃんは昨日のこのように父親の言葉を語った。「つらかったら帰ってきてもいいぞ」の言葉に込められた父親の思いをずっと大切にしてきたのだ。おばあちゃんの人生を支えた気持ちだったのだろう。

私は、この父親の生死を知らない。父親の娘を思う気持ちは、この半世紀間ずっと生き続けた。父親の命があろうとなかろうと、おばあちゃんを支えた真理である。生死を越えた真理である。色も形もない真理である。このおばあちゃんだけでなく、

私たちも仏に出会っている。

今、「絆」という言葉が語られる。絆は人と人の間だけではなく、死を越えた繋がりでもある。私のことを大切に思っている気持ちに気付いてもらいたい。私はあなたのことを大切に思っている、たとえ私が死んでも、いつまでも。どうかこの繋がりを一方的に切らないでほしい。

このおばあちゃんの子と娘は都会で働いて家庭を築いている。自分がそうであったように、おばあちゃんは子供たちとつながっている。

4. もう一つの仏

仏の話にもう少し付き合っていたきたい。

ほんの数日前の話した。70代半ばのおじいさんが亡くなった。会社を定年後、夫婦でよく寺参りをしてくれた。「手を合わせて願い事ばかりする自分が恥ずかしくて」と言ってウチの寺に参ってくれるようになった。お参りをして「私たち、ニコイチです。でも、最近は二人で力を合わせても一人前にとどきません」と笑いながら言っていた。あんなふうになりたいと思わせる生き方だった。

枕経をあげるのにこのお宅を訪れ

た。おばあちゃんが泣きながら言った。

「私は何処に帰ればいいのか？」

「ここに家があるじゃない」

と息子さんが答えた。

「お父さんのいない家は、私の帰る家じゃない」と言って泣いた。

この家は3、40年前のニュータウンとして開発された場所の一角に建つ。ふたりで力を合わせて手に入れたマイホームである。月給袋とローンをにらみながら、一生懸命に働いたに違いない。このご夫婦にとって本当に大切なマイホームだったと思う。

それが「私の帰る家ではない」と言っておばあさんは泣いた。一般的なお悔やみの言葉に、「二人で建てたこの家を守って行ってね」という言葉を聞いたことがある。私も慰めに同じようなことを言ったことがある。このおばあちゃんの言葉は私の欺瞞をついた。自分の送ってきた人生で本当に大切なものは何かを言っている。

私の帰る家。私たちの帰っていくところ。それは私たちが再び出会っていくところである。私にはそれが

阿弥陀仏の世界である。人によって思うところは異なるかもしれない。この阿弥陀仏が、もう一つの仏である。

私の大切な人はどうなったのか。私はどうなっていくのか。私はいかに救われるのか。その救いはいかなるものであるか。宗教の教理の世界である。宗教の教理を体現した仏が、第三の仏である。

さらに、この教義を表す仏の話は別の機会にしようと思う。しかし、宗教の教理や信仰の世界に足を踏み入れたことのないと思っている人に、少し申し上げたい。恐れることなく、自分自身をよりどころにして、仏法をよりどころにしてのぞいていただきたい。

5. まとめ

仏に出会うことは、自分の人生と見つめることになればと思う。私は霊を見ると言う話しに、何かしら自分自身から目をそらせているように感ずる。人生に於いて涙することは望むものではないが、その時には必ず自分の人生と向き合うことが大切である。